

川崎の歴史 Vol.3

川崎宿を訪れた幕末の志士たち（2）

【志士たちと宿場】

前回の「川崎の歴史 Vol.2 川崎宿を訪れた幕末の志士たち」では、木戸孝允、高杉晋作、久坂玄瑞、坂本龍馬らを取り上げ、歴史上で著名な幕末の志士と川崎との意外な関係を解説しました。

さて、それに続く今回は、近代日本の発展を人材育成の面で準備した著名な人物と川崎との関係から、幕末期の川崎宿の特徴を解説します。

【長州藩士 吉田松陰】

今回の主人公は、現在の山口県で私塾松下村塾を主宰し、のち明治国家を主導する人物を多く輩出した、長州藩士吉田松陰です。

文政13年（1830）8月、長州藩の下級武士の家に生まれた松陰（当時の姓は実家の杉）は、天保5年（1834）に叔父で兵学者の吉田大助の養子になると、大助の死去により翌年には数え6歳で吉田家の当主になり、勉強漬けの日々が始まります。

度重なる異国船の来航や、アヘン戦争での隣国清の敗北が知られるなか、当然、兵学者松陰の仮想敵国は西洋列強を中心とした諸外国になっていきます。嘉永3年（1850）に九州、翌年には江戸へと遊学（現代での留学）して情報収集と最新知識の獲得に努めますが、ご存じの通りその後は、藩を抜けて（脱藩）の東北地域を巡見や、下田沖に停泊するペリー艦隊での密航を企てるなど、徐々にその行動は過激さを増していきます。この時から松下村塾で教鞭をとりだすのですが、安政6年（1859）、安政の大獄に連座して江戸伝馬町で斬首、30年の人生に幕を下ろします。

こうした激動の半生を歩んだ吉田松陰と川崎宿とは、果たしてどのような関係にあるのでしょうか。

【川崎宿を訪れた吉田松陰】

まずは、松陰がはじめて川崎宿を訪れた時から確認しましょう。下に引用した史料は、嘉永4年（1851）の江戸遊学に際して、国元萩の出発から江戸到着まで記した日記『東遊日記』からの引用になります。

「八日 晴 卯前発藤沢、経戸塚・保土谷・神奈川、午後抵河崎、從藤沢至河崎、皆代官青山録平之所管也、戸塚・保土谷之間、相武之界也、但未得詳其所」 （山口県教育会編『吉田松陰全集』第七巻、177頁）

≪現代語訳≫

「嘉永4年4月8日 晴れ 卯の刻（午前5時）より前に藤沢宿を出発し、戸塚宿・保土谷宿・神奈川宿を経て、午後には川崎宿に到着をした。藤沢宿から川崎宿までは全て幕府代官である青山録平が担当す



絹本着色吉田松陰像（自賛）
（山口県文書館蔵、一部加工）

る地域である。戸塚宿と保土谷宿との間が、相模国と武蔵国との境界である。詳細なところまではまだ分からない。」

松陰の江戸遊学は、藩主の参勤交代の行列の一員として実現しますが、そこでの役割は、藩主の行列に先立って行動し、休息や宿泊場の差配をするというものでした。ですので、早朝に出発し約 31 km もの距離を移動しているのです。翌日 (=江戸に到着日) の 9 日には、「丑半時発河崎」と、午前 2 時に川崎宿を出発したと書かれており、前日は川崎宿に宿泊したことがうかがえます。その宿は定かでないですが、西日本から参勤する者たちにとって川崎宿は江戸へ入る直前の宿泊地だったことが分かります。つぎに関係が見えるのは、脱藩後に再度江戸へ遊学に上がった嘉永 6 年(1853)の日記『癸丑遊歴日録』になります。同年 5 月 24 日、中山道を通り江戸へ到着した松陰は、鎌倉にいる叔父を訪ね東海道の川崎宿を通過します。

「(前略) 経品川、々崎・神奈川・保土ヶ谷・戸塚、皆代官齋藤嘉兵衛所管也、左折入鎌倉 (後略)」

《現代語訳》

(山口県教育会編『吉田松陰全集』第七巻、209 頁)

「品川を経て川崎・神奈川・保土谷・戸塚と、ここまで全て代官齋藤嘉兵衛の担当地域である。左に折れて鎌倉街道へ入る。」

江戸から観光名所の鎌倉へ向かうためには、鎌倉街道との交差点である戸塚宿まで行く必要がありました。ここで松陰は左に曲がって鎌倉街道へ入ると記していますが、現在も戸塚駅周辺には、「左にかまくら道」の当時の標識が残されています。



歌川広重「東海道五拾三次之内戸塚」
(東京富士美術館蔵、一部加工)

最後にもう一事例だけ見てみましょう。嘉永 6 年 6 月の黒船艦隊の浦賀来航に際して、江戸に到着して間もない松陰は、これを知るなりすぐに浦賀へと向かいます。一行は海路で浦賀を目指しますが、「風潮共逆、巳時始得達品川、遂上陸疾歩、経河崎・神奈川 (後略)」と、潮の流れと風向きの影響により海路は断念し、品川で上陸し川崎宿を通り一路東海道を陸路で進みます。当時は松陰以外にも、江戸に仕事で詰めていた全国諸藩の武士たちも、情報収集のため浦賀へ向かったといわれています。

【近世後期から幕末の川崎宿】

このように、激動な半生を過ごした松陰の目立たない一面に目を向けて、いち幕末の志士と川崎宿との関係を 3 つほど確認してきました。改めて、近世後期から幕末の川崎宿の特徴を整理してみましょう。

当時の川崎宿は、①参勤交代で移動する者、②江戸からの観光客、③幕末の対外情勢逼迫に対して情報獲得を目指した者、によって多くの人が行きかったことが分かります。当時の社会状況は、江戸にほど近い川崎宿にとって、膨大な通行量をもたらすことになったといえるでしょう。

さて、川崎宿との関係を全く想像できないような長州藩の吉田松陰でさえ、こうした時代情勢のなかで川崎宿を訪れ宿泊をしていました。皆さんの知っている、または好きな歴史上の人物も、史料を改めて見てみることで、地元との意外な繋がりが見えてくるかもしれません。